

# Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Chapitre Premier “Bergson et la culture classique”におけるギリシア・ローマの古典的教養の教授について

土 屋 靖 明

## 序

グイエ (Henri Gouhier, 1898-1994) は澤瀉久敬らの大阪大学グループを中心とするフランス哲学研究会が、1968年の時点で、ポスト・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) となる現代哲学者 15名の1人として、バシュラール (Gaston Bachelard, 1884-1962)、ブランシェヴィック (Léon Brunschvicg, 1869-1944)、マルセル (Gabriel Marcel, 1889-1973)、マリタン (Jacques Maritain, 1882-1973)、メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961)、ムーニエ (Emmanuel Mounier, 1905-1950)、リクール (Paul Ricoeur, 1913-2005)、サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) 等と共に、その名が挙げられている<sup>(1)</sup>。パリ大学教授としてデカルト (René Descartes, 1596-1650) 以後の近現代のフランス哲学宗教思想史を講じたグイエは、哲学者と言うよりも哲学史家と言うべき存在であって、*L'essence du théâtre*, Plon, 1943. *Le théâtre et l'existence*, Aubier, 1952. *L'œuvre théâtrale*, Flammarion, 1958. 等の演劇論に関する著作を除いては、哲学史関連の著述に専念している。

著作一覧は、以下の如くである。

・ *La pensée religieuse de Descartes*, Vrin, 1924.

・ *La vocation de Malebranche*, Vrin, 1926.

・ *La philosophie de Malebranche et son expérience religieuse*, Vrin, 1926.

・ *La vie d'Auguste Comte*, N.R.P., 1931.

・ *La jeunesse d'Auguste Comte et la formation du positivisme*, 3 vols, Vrin, 1933-1941.

・ *Essai sur Descartes*, Vrin, 1937.

・ *La philosophie et son histoire*, Vrin, 1944.

・ *Les conversions de Maine de Biran*, Vrin, 1947.

・ *L'histoire et sa philosophie*, Vrin, 1952.

・ *Les premières pensées de Descartes*, Vrin, 1958.

・ *Bergson et le Christ des évangiles*, A. Fayard, 1961.

・ *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin, 1962.

・ *Blaise Pascal commentaires*, Vrin, 1966.

・ *Les grandes avenues de la pensée philosophique en France depuis Descartes*, Louvain, 1966.

これらグイエの15編の著作のうち、邦訳として紹介されているのは、佐々木健一訳『演劇の本質』(TBSブリタニカ, 1976年)、中村雄二郎・原田佳彦訳『人間デカルト』(白水社, 1981年)、佐々木健一訳『演劇の存在』(未来社, 1990年)、大崎博・藤江泰男・益邑齊訳『メヌ＝ド＝ピラン―生涯と思想―』(サイエンティスト社, 1999年)の4点であり、グイエの認

戸大学ビジネス学部ビジネス学科・講師

知度は、日本においては必ずしも高いとは言えないのが現状である。

本稿で取り上げる *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Vrin, 1959. もまた、そうした哲学史家グイエの労作である。章構成の順番は、以下の如くである。

- I. “Bergson et la classique”
- II. “Les sophismes de Zénon d’Élée”
- III. “Histoire du bergsonisme et histoire des sciences”
- IV. “Causalité et création”
- V. “La création comme donnée de l’expérience”
- VI. “《L’éternité vivante》”
- VII. “L’histoire bergsonienne de la philosophie”
- VIII. “Le Dieu de *L’Évolution créatrice*”
- IX. “Les personnalités créatrice”
- X. “《Je travaille les mystiques》”
- XI. “Mysticisme grec et mysticisme chrétien”
- XII. “Le bergsonisme comme philosophie nouvelle”

グイエはこの著作において、ベルクソンをヘレニズムとヘブライズムという西洋古典思想の観点から論考しようとした次第である。

### Chapitre Premier “Bergson et la classique” について

本章は<sup>2)</sup>、後続する章の概略という位置付けで記されており、ベルクソンが中等教育段階のリセ＝コンドルセ (Lycée Condorcet) と高等教育段階の高等師範学校 (École Normale Supérieure) の学生時代に学んだ古典的教養について、複数のリセ教員時代、高等師範学校講師時代、コレージュ＝ド＝フランス (Collège de France) 教授時代に行った西洋古典に関する講義の題目などについて言及したものである。

その内容も、『書簡・講演録』(*Écrits et paroles*, 1957), 『小論集』(*Mélanges*, 1972) に

収録された「良識と古典学習」(1895年7月30日)、「中等教育における哲学の位置と性格についての覚書」(1902年12月18日)、「哲学の教育についてのアンケート。高等中学校の生徒へのベルクソン哲学の影響についてビネとの討論」(1907年11月28日)、「古典教育と教育改革」(1922年11月4日)などをも踏襲されたものであって、極めてオーソドックスに叙述されたものである<sup>3)</sup>。しかしながら、最終的にはカトリックというヘブライズム思想に回帰していったベルクソンの、若年期におけるヘレニズムの古典に対する関心が窺てとれる文書として、更には19世紀後半から20世紀初頭のフランスにおける古典教育の様相をも示してくれる史料として、紹介しておきたく思われる所存である。本章の概略は、次のようなものである。

冒頭部は、〈精神の形成と哲学的素養の涵養のいずれにおいても、ギリシア・ラテンの人文性が不可欠である〉との旨の文言から、始められている (p. 15)。

ベルクソンはリセ・コンドルセに1868年から1878年まで在籍し、卒業後は高等師範学校に入学する。ベルクソンはラテン語作文、ラテン語翻訳、ラテン語演説、ギリシア語翻訳、ギリシア語作文において、大賞または次席賞を獲得している。全国学力コンクールにおいても、ラテン語演説やギリシア語翻訳で賞を獲得し、数学や英語、哲学においても入賞した。それ故に、ベルクソンは常日頃からそうした古典的教養の教育的価値を認めていた (p. 15)。

ベルクソンは1919年から1925年まで公教育高等評議会の役職に就いており、レオン＝ベラール大臣への協力を惜みず、〈万学のためのラテン語〉を確証するために、中等教育改革に参画した。当時、A. ラテン-ギリシア、B. ラテン-言語、C. ラテン-科学、D. 科学-言語の4部門があり、〈近代学〉は自由部門であった。改革者たちは、〈近代学〉を取り除くことを重視した。ベルクソンの提案は、とても的を得たものであった。リセの教育は、バカロレア (大

学入学資格試験)へと直結する、とても優秀なエリート学生を対象としたもので、ギリシア・ラテンと科学性とを同時に学べるセクションは、たった1つしかなかった(pp. 15-16)。

〈理論的知性〉の形成と〈実践的知性〉の形成との間に横たわる根本的相違は、ベルクソンの思想の哲学的基盤を為すものであった。ベルクソンは文教高等会議(Conseil supérieur de l'Éducation Nationale)と下院(Chambre des Députés)とにおける討論以外でも、レオン＝ベラルの改革に参加することの件で、道徳政治科学アカデミー(Académie des Sciences morales et politiques)においても検討を行うよう促した(『ギリシア＝ラテン学習と中等教育改革』)(p. 16)。

ギリシア＝ラテンの古典的学識は凡そ(à peu près)に反発し、的確さ(précision)を追求した。「人類は長きに亘って知性なしで済ませてきており、知性はその昔、ギリシアの片隅の僅かな人たちが凡そでは不十分と考えて、的確さを追求したことに由来する」。発明の大切さはよく理解されていることではあるが、「哲学に最も欠けているものは、的確さであった」。ベルクソンが古代哲学に傾倒した所以は、その的確さにある(p. 16)。

ベルクソンが処女作として1883年に発表した『ルクレティウス抜粋』(*Extraits de Lucrèce*)は、ルクレティウス(Titus Lucretius Cărus, 94-55.BC)の詩、哲学、自然学、言語などに関する註釈と研究とを行ったものである(p. 17)。

1885年から1886年にかけて、ベルクソンはリセ＝クレルモン＝フェランの文学部の教授として、〈教養の分野〉と〈歴史の分野〉の講義を担当した。「1885年から1886年。アリストテレス。とりわけ自然学と形而上学とを強調するアリストテレスの学説の説明。科学の発展に関して、アリストテレスによって与えられた影響」。1886年から1887年(『アリストテレスの道徳と政治』・『エピクロス主義者とストア主義者』)(p. 17)。

1889年12月27日、ベルクソンはソルボンヌで博士論文を発表した。主論文は『意識の直接与件に関する試論』(*Essai sur les données immédiates de la conscience*)、副論文はギリシア哲学史を題材とした『アリストテレスの場所論』(*Quid Aristotelis de loco senserit*)である(p. 18)。

ベルクソンがリセで行った講義の全てを知ることには出来ない。リセ＝アンジュ(1881年10月から1883年9月)、リセ＝クレルモン＝フェラン(1883年10月から1888年9月)、パリのリセ＝ルイ＝ル＝グラン(1889年度から1890年度)、1898年2月の高等師範学校就任までのリセ＝アンリ4世校(1890年10月から1898年2月)。『ギリシア哲学史』に関する二つの講義だけは手にすることが出来る(p. 18)。

一つ目の講義録は、97頁に及んでタイプライターで打たれたもので、アリストテレス(Aristoteles, 384-322.BC)までが網羅されている。二つ目の講義録は56頁に亘っており、プロティノス(Plotin, 205-270)やアレキサンドリア学派にまで至っている。それは1894年から1895年において、高等師範学校での下準備のために、リセ＝アンリ4世校の学生向けに為されたものである。それは1895年にConcoursを受けたと覚しきバシュという生徒のノートによるところのものである(p. 18)。

講義が行われた学び舎や日時に関しては、手掛かりが存在しない。ジャン＝ギュットン氏によってベルクソン講義録の出版者であるアンリ＝ユード氏に返却された黒ノートには、次のように記されている。「黒ノートは我々の同僚であるアンドレ＝オブレダンによって、1923年に(高等)師範学校に返却されていた。どうして彼がそれを所持していたのかは分からない。アンドレ＝オブレダンは1958年に他界するが、今のところ我々が〈黒ノート〉と呼ぶその貴重な文書の本元に関しては、詳しく分かっていない」(p. 18)。

運動に関するエレア学派のゼノン(460.BC頃)の4つの論題について用意された学説にお

いて、ベルクソンは「4つの論題は、先行するものよりも、遥かに脆弱である」と宣言した。『物質と記憶』(Matière et Mémoire, 1898…MM)には、「ゼノンの議論において最も注目すべきは、御存知ではあろうが、理由もなく軽視されてきた4番目のものである。そうした不実を修正するために、テキストと同じ性格でもって出版されるように、前頁に亘る長い註釈を書いた」(MM212-213)。(p. 19)。

『物質と記憶』は、1896年に世に出される。講義録は、1896年以前のものである。ここで大切なのは、資料の格別なる歴史的意義である。我々はベルクソンの思想において、古代の偉大なる哲学者たちの深奥で、体系化された客観的な認識などを窺い知ることが出来る (p. 19)。

コレージュ＝ド＝フランスにおけるベルクソンの授業は、辞令に先立ち、1900年5月17日に開始される。1897年には、1897-1898年度の第1セメスターのカール＝レヴェック教授の代理を任された。そして、「プロティノスの心性学」, 「プロティノス『エネアデス』第4巻の註釈」(靈魂論)の講義を行う。カール＝レヴェックは、ベルクソンが現代哲学講座のガブリエル＝タルドの後任となる2年後の1904年11月19日まで正教員を務めることになる、ギリシア＝ラテン哲学の講座を担当していた。その期間中に、ギリシア哲学に関する二つの講義が準備されることになる (pp. 19-20)。

1900-1901年。「土曜日の講義は、紀元2世紀のアレクサンドル＝アプロディシアスの〈運命について〉の講釈に充てられた」(p. 20)。

1901-1902年。「ベルクソン氏は土曜日に、プロティノス『エネアデス』第6巻第9章の〈善なるもの一なるもの〉の訳読を行う」(p. 20)。

1902-1903年。「ベルクソン氏は土曜日に、アリストテレス『自然学』第2巻〈自然ともの〉の訳読を行う」(p. 20)。

1903-1904年。「土曜日の講義は、アリスト

テレス『形而上学』第11巻の解説に充てられた。詳細に関しては、首尾一貫してアリストテレスのテキストをアレクサンドルによって為された註釈に近接させていた。著作の註釈に関しては、全体的に〈不動なる第一の動者〉の觀念と〈思惟の思惟〉の觀念との間に打ち立てられた関係についての正確な意味を探求することであった」(p. 20)。

ベルクソンはアリストテレスとプロティノスという題材に着目しながら、〈ギリシア＝ラテン哲学〉の講座を担当した。1904-1905年度に始まることであるが、現代哲学はそのようにしてベルクソン哲学によって課された探求課題を、古代哲学のそれと置換したように思われる。古代哲学者たちと声を出して対話を継続するためには、そうした哲学がベルクソンに関して正当な理由を示してくれない限りは、語るべくもないのである (p. 21)。

## 註

- (1) 澤瀉久敬編『現代フランス哲学』, フランス哲学研究会, 雄渾社, 1968年。
- (2) Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Librairie Philosophique J. Vrin, Paris, 1989, pp. 15-21.
- (3) 花田圭介・加藤精司共訳『ベルクソン全集8小論集I』, 白水社, 1966年。松浪信三郎・掛下栄一郎・富永厚・秋枝茂夫共訳『ベルクソン全集9小論集II』, 白水社, 1965年。

付記：本稿は2010年3月28日(日)に京都大学で開催された第27回ベルクソン哲学研究会, 2010年9月12日(日)に文教大学で開催された第28回フランス教育学会で行った口頭発表の原稿を加筆修正したものである。大会の会場で御意見御質問を下された全国のベルクソン哲学研究者の皆様方, フランス教育学研究者の皆様方にこの場を借りて謝意を申したい。

## Sur le professeur de la culture classique grecque et latine de *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Chapitre Premier “Bergson et la culture classique” Chez Henri Gouhier

Faculté du Commerce Spécialité du Commerce  
Université de Hachinohe  
Yasuaki Tsuchiya

Le but de cette composition présente Chapitre premier “Bergson et la culture classique” de *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale* Chez Henri Gouhier comme un document historique pour connaître un aspect sur l'enseinemet secondaire et l'enseignement supérieur de France d'Âge du but du 19 siècle et de la tête du 20 siècle.

Ce chapitre particulièrement se baser sur *Mélanges* et *Écrits et paroles* chez Henri Bergson, et puis cette description est très orthodoxe et normale. Bergson avait la foi catholique sur ses vieux jours, mais il voulait unir sa destinée à fraternelles judaïques. Pourtant, l'objet intéressant dans sa jeunesse était des pensées helléniques uniquement, surtout Zénon d'Élée.

L'œuvre vierge chez Henri Bergson est *Extraits de Lucrèce*, en 1883. Bergson présenta ses thèses de doctorat à la Sorbonne en 1889, et puis la thèse complémentaire emprunte son sujet à l'histoire de la philosophie grecque : *Quid Aristotelis de loco senserit*. Et il parla à Antoine Dalmace Sertillanges de Plotin comme la philosophie antique plus ressemblant à soi-même cordialement.

Professeur au Lycée de Angers (1881-1883)/Lycée de Clermont-Ferrand (1883-1888)/Lycée Louis-le-Grand à Paris (1888-1889)//Collège Rollin (1889-1890)//Lycée Henri-IV (1890-1898)//l'École Normale supérieure en 1898, Bergson est chargé de conférences sur la philosophie grecque classique sur les Épicuriens et les Stoïciens, et cætera. L'enseignement de Bergson au Collège de France commence avant sa nomination 1900, il assure la suppléance du professeur Charles Lévêque qui occupe une chaire de philosophie grecque et latine. Selon Henri Bergson, l'esprit classique est justement une réaction contre l'à peu près, les études grecques et latines soient une école de précision.